昭和二十年の入学（9・1・18）

小谷　壽（昭23・理）

御紹介頂きました小谷でございます。本来なら今日お話し致します一種のヒストリーのようなことというのは、文科を卒業されました文系の先生方がお話しになるのが適当と考えます。それを理科を卒業して工学部出の私のような人間がなぜということになりますが、それは先ほども今の住所のことでお触れ頂きましたように、私自身生まれましてからずっと現在に至りますまで、同じ家に住んでいるということによるのでございます。幸い物をしまう場所もそれなりにございましたため、三高入学前後の、今日の私の話に関係致します資料が、引越で散逸することもなくて、割方物持ちよく残っていたということでございます。実のところを申しますと、残していながら、忙しさにかまけましてその後見ることもなく、中には残していたことを全く忘れてしまっていたものさえございました。停年退官後にできました暇のおかげで、何が残っているのかをようやく確かめることができました。それからしばらく致しまして今から三年半ほど前になります

が、創立百二十五周年記念大会の後、われわれ昭和二十三年理科二組卒業生が集まりましたときに、私が入学したころの資料をコピーして出席した友達に配りました。それを、今日もわざわざこの会に吹田から来て頂いておりまして、このときのクラス会の世話人でありました池田榮一君が丁寧に読んで下さいました。先ほど今日の話は、三高舎密クラブでの一昨年の話が基になっているとの御紹介がございました。この三高舎密クラブでの話を池田君が誘いかけられましたときは、そのお言葉を借りながら申し上げますと、次のようなことでございます。三高舎密クラブでいろいろな話があるけれども、それらはどうも三高時代は自由でよかったというふうな先輩の方々の話ばかり。ところがわれわれの入学したのは、実はそんな自由でよかったという時代では決してなかった。この前のクラス会であなたの手元に資料が残っているのがわかったので、三高の長い歴史の中にはこういう、およそ自由とは程遠いこともあったのだということを、ぜひ話して欲しい、という池田君からのお勧めでございました。

本職で研究室に勤めている間でしたら、とてもそんな話は、いくら池田君から頼まれましても、お引き受けはしなかっただろうと思います。ところが退官致しますと、かなり無責任に厚かましくなりまして、専門外の話を人様の前でさせて頂くことへの抵抗が随分弱くなりました。それにもう一つ、次のようなことがございました。私が退官致します少し前のことであったと記憶しておりますが、たしか京大学園新聞に農学部を御退官になりました先生が、天皇の諡につきまして、

これから申し上げますようなことを書いておられました。どういうことかと申しますと、「後」という字のついた天皇で、例えば後醍醐天皇とか後白河天皇とか、「後」を取った諡の天皇がすぐわかる場合はよいけれども、後深草とか後小松とかいう諡のときは、以前の何天皇によってつけられたのか、歴史を専門にやっている友人の先生に訊いても知らんと言う、読者で知っている人があれば教えて欲しい、というふうな文でございました。私はこの先生は答を御存知で書いていらっしゃると思いましたが、後深草の深草がどの天皇を指すか、また後小松の小松が何天皇であるかということを、私は中学校時代に、歴史ではなくて多分国語の時間ではなかったかと思いますが、「小松の帝」とか「深草の帝」というふうに習ったことを覚えております。年齢のことがあるにしましても、理系の人間でも知っているのに、歴史が専門の先生が御存知ないとは、たとえ話半分ということがあったにせよ、私にとって意外でございました。本職の先生でもこのごろは分野が細分化して、御自分の専門分野だけで、歴代天皇の諡などにはどうも余り御関心がないのであろうと思いました。歴史の先生でもこのようなことなら、素人でも自分の体験した歴史的なことを、物事は知っていると申しますか経験したと申しますか、これがあるとないとではゼロと無限大ほどの差がございますから、大きい顔してしゃべれるだろう。どうも大変長い前置きになってしまいまして申し訳ございませんでしたが、こういういわば開き直った気持になりまして、三高舎密クラブやここで話させて頂くこととなりました次第でございます。

こちらでお手元にございますいくつかの資料を御用意頂きましたが、話の大筋はレジメにありますとおりでございまして、入学試験から始まりまして戦争が終りますまで、例年とは非常に違った形の試験や入学式などにつきまして、話させて頂きます。私らの入学致しましたころの時代は、一年違えばその経験もかなり違うという時代でございました。私の一、二年上の方々に関しますことでは誤りがありますかも知れませんし、私自身が体験致しましたことでも、いくら若干の書類が残っていたとは申しますものの、それらを頼りに忘れかけた記憶を呼び起こしての話でございます。今日も私がこういう話をするということで、当時一緒に入学した懐しい方々がいらして下さっております。私の話に何か間違いがございましたら、後ほど御訂正頂いたり、あるいはまた追加をして頂きますと幸いに存じます。

それでは本題に入ります。御配付頂いておりますこの話に関連致します事項を並べました年表でございますが、中央公論社刊行の〝日本の歴史・別巻5〟などによりました、戦況・政治・社会に関します事項と、入学試験・入学式などにつきましてのことが並べてございます。年は戦局の転換点となりました昭和十七年のミッドウェー海戦敗北から始めております。この二ケ月ほど後の十七年の八月に、もう既にここに書いてございますように中学から大学まで、学年を短縮して早く卒業するように決定されております。何と言っても戦局の一番大きい転機となりましたのが、やっぱり昭和十八年二月のガダルカナルからの撤退でございます。補給線が伸び切ったとこ

ろをたたかれましてそこから「転進」という、「終戦」と同様の便利な日本語が発明されました。この撤退がありました後、五月にこの話の入学に直接関係致します、中学生以上を学徒動員するということが決まっております。さらに今日の話に直接関係致しますのは、九月の理工科以外の学生の徴兵猶予停止でございます。これに続きまして、これは昭和天皇が亡くなられましたときに随分テレビで見ましたけれども、学徒の出陣があったわけでございます。

明くる昭和十九年に入りましてからですが、ここにございますようにいよいよ六月ごろから中学生以上の勤労動員が本格的に始まりまして、私のおりました京都一中の場合には、非常に幸いなことに、京都の工場への動員でございました。このように勉強が無くなって行きだしましてから、七月にサイパンが陥落して、それで東条内閣総辞職があり、十一月にはサイパン島からB29が飛んできて東京を爆撃するというふうになって参りました。これからのことは今日の話から致しますと多少余談になりますものですけれども、年表のこちらの列に書いてございますのは、今申しましたように七月一日から行きだしました学徒勤労動員のことでございます。私どもは国際航空工業が動員先でございました。京都のあちこちにございました鐘紡の工場で、紡績機械を全部スクラップにしてそこで飛行機づくりなどをやったわけでございます。このときの今で申しますと給与明細書が、一中時代の物の中に残っておりました。ここに書きましたように報償金が五〇円、翌昭和二十年の四月から六〇円という金額を貰っておりました。この五〇円とか六〇円が

高いのか安いのかということでございますが、当時は親がかりの生徒の身分で、食費とか衣料費とかについては全くわかりません。そこでこのＯＨＰのように、はがきや封書の切手代、市電・市バスの運賃、岩波文庫の値段を、昭和十九年八月～二十年八月と、現在平成九年一月とで比べてみました。この列にございますように、八〇〇から二、二〇〇というファクターになります。非常に粗っぽい話になりますが、一、三〇〇から四〇〇あるいは一、五〇〇ぐらいが大体こういうファクターとして使えるんじゃないかというふうな感じが致します。このファクターでつかんで頂いたらと思います。このファクターを求めるために古い文庫本を調べておりましたとき、戦争末期に、ちょうど今の消費税のように、「特別行為税相当額」というのが、本の価格に上乗せしてあったことに気付きました。私にとっては新しい発見のような気がしております。また子供のころには、市電が乗り換えが二回できて六銭だった、とばかり思い込んでおりましたが、これも昭和十八年からは十銭（恐らくは一回の乗り切り制）になっておりました。それでこの五〇円という学徒勤労報償金でございますが、このファクターによりますと十万円には届きませんけれども、現在のちょっとしたアルバイト代ぐらいにはなってるんじゃないかと思います。この報償金支払明細を見つけ出しますまでは、当時は命を的にただでこき使われていたんだとばかり思っておりましたが、実はそこそこの金を払ってくれていたんだなというのが実感でございます。

それでいよいよ本題の入学試験のことでございますが、先ほどの年表に戻りましてもう少しそ

のころの政治・社会などを見ておきますと、この列に示しておりますように十二月に入りまして、これは昭和十九年でございますが、中学生の卒業を延期して今の動員をしばらく続けるということが決定致しております。これが入学時期を例年とは全く違ったものにする一つの大きい要素であったと思います。そして十二月には東海地方に大地震がございました。京都三中の方は愛知県の航空機工場へ行かれていて、この地震で亡くなった方も確かいらっしゃったと覚えております。京都でもかなり強く揺れました。地震がありました直後、ここに書いておりますように、十二月十五日から二十四日までの期間、入試出願がございました。内申なんかもございますから、動員先で先生に申し出て学校を通して出願したんだろうと思います。見て頂きたいのは、先ほど理工系を除いて徴兵猶予が無くなったことを話しましたが、いろんな状況から平和時ならともかくこの時期のような大乱世には、高等学校に文科など一にぎりの生徒以外いらないという発想でしょう、ここにありますようにたったの三〇名、それに対して理科は甲が二四〇、乙が八〇、合わせて三二〇名、今度入学する三高生はほとんど大部分が理科の学生である、というふうなことでございます。

ＯＨＰに致しましたこの〝入学志願者心得〟も私の手元に残っておりましたもので、ちょっと字が小さくてお読みになりづらいと思いますが、ここに今申しました人数が「入學者數」という項目のところに、「昭和二十年度ニ本校ニ入學セシムベキ生徒概数（マヽ）左ノ如シ」として書いてご

ざいます。それでちょっと左の方へ目を移して頂きますと、実はこの昭和二十年の前後には全然こういうことは無かったんであろうと思いますが、私らのときには今の共通一次と二次試験じゃございませんけれども、足切りがあったことを示すことが書いてございます。この「選抜要領」の三、にありますように、「第一次ニ於テハ出身中等學校長ノ調査書ニ基キ旦中等學校ヨリノ從來ノ入學者ノ実績ヲ参考トシテ入學セシムベキ定員ノ約二倍ヲ選抜シ……」とございまして、内申書で定員の約二倍までの足切りをやる、それでこの足切りを免れた者に試験を受けさせようということでございました。この足切りの発表がありましたのは、「四、入學者選抜ノ期日左ノ如シ」の中に「第一次發表　昭和二十年一月十一日」と書いてありますように、正月早々でございました。それでその次の行にあります「第二次選抜施行」というのは筆答試問が一月二十三日に、身体検査・口頭試問が一月二十四日から二十六日の間にあって、例年なら三月にあります発表はここに「入學許可者發表　昭和二十年一月三十一日」と書いてありますように、一月の末にありましたわけです。どうもこの〝入学志願者心得〟には、筆答試問の日付けだけで、どういう科目でどのような時間割であったのか書いてなく、いろいろ探してみましたがこれらを書いたものが見つかりませんでして、日日以外のことはよくわかりません。ただ一つ、大阪の舎密クラブで話しましたとき、文系の方だったと思いますが、こういう問題が出たのを覚えている、とおっしゃっておりました。

私どもの受けました入学試験で一つぜひ申し上げておきたいのは、この二十三日の筆答試験の途中に、それは午後でございましたけれども、空襲警報が発令になりまして試験は中止、後日やり直し、ということになりました。この警報発令につきましては、大阪で話しましたときに、「たしかこんなこともあったような気が致します。」というふうに申しましたところ、話を聴いておられましたお一人の方から、京都なら総合資料館へ行けば当時の新聞記事で確かめることができる、というアドバイスがございました。まず手始めに近くの京都北図書館で調べましたところ、このＯＨＰにございます〝京都の「戦争遺跡」をめぐる〟［池田一郎・鈴木哲也著、機関紙共同出版（平成三年）］という本の中に、「一九四五（昭和二〇）年京都空襲被害者一覧」という表が載っておりますのを見付けました。ここにオレンジで波線を引いてございますが、確かに一月二十三日の午後には京都で空襲警報が発令になってもおかしくないような事態がございまして、午後二時四十分に宇治［宇治町宇治（現宇治市）］や久世郡御牧村（現久御山町）が銃撃を受けまして、負傷者も出たことが書いてございます。恐らく午後二時ごろに警報が発令されたんじゃないかなあというふうに推察致します。空襲警報発令になりましてこの日は帰宅致しました。

途中で中止になりました試験は、この辺は私の記憶がはっきり致しませんので、覚えておられる方がいらっしゃいましたら後ほどよろしくお願い致したいんですけれども、先ほどお見せ致しました〝志願書心得〟の「選抜要領」の所のこの二十四日から二十六日は身体検査・口頭試問と

なっておりますが、たぶんこの期間に、警報発令などのことを考えて筆答試問の予備日が取ってあったんではないかと思います。とにかく中止になった筆答試問の再試験がございました。正規の二十三日のときには各人に問題を印刷した用紙が配られてそれに解答を書くということでございましたけれども、この再試験の方は、物のない時代でございましたから予備問題・解答用紙が印刷されていなくて、監督の先生、実はこれは入ってからわかったんですけれども、私の受けました部屋は山本修二先生でしたが、監督の先生が試験問題の文章を二回お読みになって解答用紙に答を書くというものでございました。表題は、その時には寅彦のものかどうかはわかりませんでしたが、「茶碗の湯」でございました。ところが山修さんが「茶碗のゆう」っていうふうに発音されましたので、しばらくはその後の文章を聴きながら「ゆう」というのは何かなあと悩んだことを覚えております。それで山修さんは問題をまず一回読まれて、「こういう問題なんでもう一回読みます」ということでございました。こんな形の非常に異例な入学試験でございました。

筆答試問ではこういうハプニングもございましたが、この「選抜要領」にありますように三十一日に発表がございました。この発表を見に行ったのか、あるいは通知があったのか、と言いますのは、この三十一日、曜日を調べてくると良かったなあと実は思っておりますのですが、多分この日も工場へ働きに行っていたと思います。ですから仮に見に行ったとしても作業が終わってからの話であったと思います。このＯＨＰはその時の入学許可の通知書でございます。一緒に送

られて来ました〝入学者心得〟の主な部分のＯＨＰがこれでございますが、例年とは違う時期に発表がありましたのに、入学金は例年どおり三月三十一日までに納めるようにとございます。ここに書いてあります入学料金三円という金額が、当時の物価から致しまして高いのか安いのか全くわかりませんが、これより二年半ほど後の昭和二十二年八月に生徒に配られました〝学則摘要〟では、入学金は二十五円ということでして、わずか二年半の間に八倍以上と、当時の戦後の激しいインフレを反映しているのだと思います。入学式は、前にお見せ致しました入学許可通知のＯＨＰにございましたように、またレジメにも書いておりますように、「追テ通知ス」ということでして、普通は四月の初めごろに入学式がございますが、この通知が来まして、そのまま続いて働きなさい、ということでございました。それで先ほどの年表に戻りまして、ここにございますように、昭和十九年十二月一日に「中学生の卒業延期、勤労動員の継続決定」ということで、試験が終わりましてから六月の末までは、今までどおりの所で、今までのように働いていたのでございました。

〝入学者心得〟と一緒に送られてきましたこのＯＨＰの〝寄宿舎に関する一般心得〟では、この箇所にありますように、「寄宿料ハ一ヶ年参拾圓トス」、また「食費ハ現在月貳拾圓トシ毎月五日マデニ必ズ其ノ月分ヲ前納スベシ」と書いてございます。次のＯＨＰはこれよりは後で届きました授業料などの納付についての通知でございますが、「拝啓本年度前期分授業料等納付額左記

之通ニ付キ至急納付相成度此段及通知候」、さて「記」の中味でございますが、「前期分授業料金五拾圓也　〃報國團費　金七圓五拾錢也（自七月至九月分）　報國團入團金　金拾圓也計　金六拾七圓五拾錢也」とありまして、年月日の記入はなく、「第三高等学校会計課」とございます。月日が多少前後して申し訳ございませんが、この授業料納付につきましての通知は、後からお話し致します入学式の通知書と一緒に届いたものでございます。先ほど申しましたように、われわれは軍需工場で働いて月々五〇円の報償金を受け取っておりました。これでちょうど授業料の前期分が払えたということでございます。この授業料も先ほど申しました昭和二十二年八月の〃学則摘要〃では年額四〇〇円と四倍になっておりまして、二年ほどの間にいろんな比率で物の値段が上がっているということでございます。

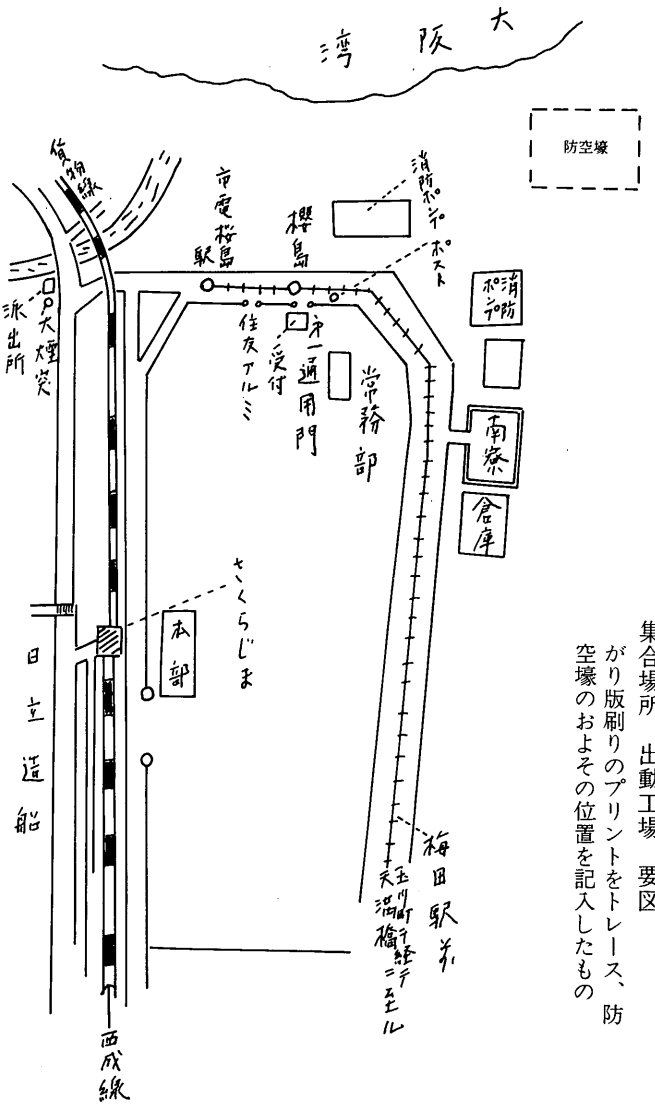
勤労動員を続けておりましたうちに、年表の次の行に移りますけれども、御覧頂きますと、五月二十二日付で学校の方から入学式に関します通知が、本人と父兄あてに参っております。本人あての通知がこのＯＨＰでございます。今日の話の資料を送りましてから井垣さんが非常に不思議に思われましたのか、お尋ねの電話を頂戴致しましたが、実は後からお話し致しますように、もう一度七月二十一日にも入学式が行われております。今ＯＨＰで見て頂いております最初の七月一日の入学式というのは、私はほとんど記憶がございません。本日いらっしゃってる方の中で、もし御記憶のある方がおられましたら、ぜひ後ほどこんな入学式であったということをおっしゃ

って頂きたいと思います。この私あての通知には、まず理科第一学年甲類二組、それから私の名前がありまして、本文は「來ル七月一日午前八時入學式擧行可致ニ付相違ナク登校スベシ」とございます。これだけでしたら戦争中でもあるし、学生あてだけ通知があったのかと思いますが、実はこのＯＨＰにしております案内は、父親が亡くなりました後父親の手紙類を整理しておりましたら、こちらでコピーして頂きまして皆さんにお渡し下さっていると思いますが、石橋先生の手紙と一緒に出て参りました。「來る七月一日午前八時入學式擧行致すべく候に付御差支なき限り御臨席被下度此段得貴意候　敬具　　昭和二十年五月二十二日　　第三高等學校　　父兄殿」という、生徒あての通知とは違いまして平仮名書きの案内でございます。今の入学式ですとほとんどはお母さんが着飾って、嬉々として、本人より母親の方が喜んでいるという入学式光景を何回か目に致しましたが、戦時中しかも空襲警報が度々発令されておりました時期に、母親が入学式に出ていたという記憶は全然ございません。皆さんのうちに覚えてられる方がおられましたら、と思いますが。とにかくこれで一度、新徳館で入学式があったようでございます。当時の校長は前田鼎先生でございましたけれども、どんな話をされたのか、その他どの先生からどんな注意があったのか、全く記憶に残っておりません（注1）。

六月末で中学校での勤労動員が終わりまして、入学式も終わりました後は、次の三高での勤労動員のため何かそれなりに準備していたんだと思いますが、七月九日付で今度は実質的な入学な

どについて、本人と父兄あてに連絡がございました。これがその連絡の一つのはがきを拡大コピー致しましたもののOHPですが、「七月十四日以降ニ於テ勤労動員先ニ集合、入学セシムベキニツキ出身中学校ニ連絡シ本校ヨリノ諸指示ヲ承知スベシ」とございます。これに続きまして、私の場合のように家が京都にありまして即日登校帰宅しうる地域内に現住する者は、七月十二日の午後一時から本校で指示するから出て来い、と書いてございます。さらにここに横手に線を引いてございますが、いかにも当時を思わせる文章がありまして、「尚當日編隊空襲等ノ際ニハ十三日同時刻ニモ之ヲ行フ」とございます。次に同じく七月九日付で、こういうふうに第三高等学校として校印を押した命令書というのが私あてに来ております。「右者第三高等學校生徒トシテ昭和二十年七月十九日十三時入校スベシ」。私は先発隊ではございませんでして、大多数の人々と共に十九日に入校致しました。早い方は十四日に入校しておられます。それで「入校ノタメ参集スベキ場所」は、これはよく覚えておりますが、「大阪市此花区島屋町五六北港南寮」、大阪の北港にありました住友伸銅所の南寮でございます。ここに「追而既ニ學徒勤労動員下令ニツキ左記工場ニ挺身スベシ　神武第一〇〇一工場」とございますように、住友伸銅所という名は全然出ておりません。当時はそう言えば各工場は神武第何工場というふうに、要するにどこで何を造っているかをわからなくするために、このように呼んでいたのを思い出します。これは命令書でございますが、次のOHPは一緒に届きましたいろんな注意事項のコピーでございます。「一、

集合日時場所　出動工場　　昭和二十年七月十九日（但特ニ指示セラレタルモノハ七月十四日）一三〇〇――一五〇〇」とございます。この「集合地ニ至ル交通路」には、懐かしい言葉で「省線西成線」と書いてございまして、そして続きましては、がり版刷りのプリントのコピーであまり見やすいものではございませんが、「要図」のＯＨＰでございます。この図は上が西南西の方向になっております。どんな場所であったかと申しますと、新しい地図を後でお見せ致しますが、これが西成線の先端の「さくらじま」でして、ここは今も終点になっております。入校致しました北港南寮は赤線で囲んでおりますこの場所、青線で囲みましたこの辺一帯に十人ほど入れる防空壕が多数掘ってありました。この辺は〝北港〟と今でも呼んでいるらしゅうございます。この南寮や倉庫から割方近い所には社宅やその他、いろんな建物があったと思います。ここに書いてございますように、伸銅所の塀に沿って市電が走っておりまして、〝市電桜島駅〟が終点でございました。この図で工場敷地の右上（西北）の角のこの折れたラインだけはちょっと御記憶願いたいと思います。それでこれが昭和十一年の地図のＯＨＰでございますが、今申しました伸銅所の西北の角が同じ形をしております。なぜこの形をした線にこだわっているかと申しますと、当時の工場跡地を訪ねて特定致しますときに、工場の塀のこの部分のラインが目印になったからでございます。先ほど申しましたように池田君から舎密クラブでの話の御依頼がありましたとき、実に約五十年ぶりにこの辺一帯を歩き、所々写真も撮って参りました。記憶に残っております当



集合場所、出動工場　要図
がり版刷りのプリントをトレース、防空壕のおよその位置を記入したもの

時の面影はほとんどなくなってしまっておりまして、昔をなんとか思い出させるものは、ここの塀の曲がり具合を表す線だけでございました。

今この北港南寮のあった辺がどうなっているかと申しますと、九四年版の地図ではこのＯＨＰのようになっておりまして、ここの場所の塀のこの線だけは、依然として市電が走っておりましたころと同じ形のままでございます。この外に何か昔を偲ばせるような物が残っていないかなという、まるで産業考古学のような話でございますが、歩きながら探しておりましたら、この現在の地図でライディングパーク西側沿いの、この辺の塀の下の部分がどうも住友伸銅所時代そのままの塀ではないかと思われるものでした。この辺の塀はかなり傷んでおりまして、塀から東へ少し離れまして住友金属工業の建物がございます。この建物から少し間をおいて北側には日新製鋼大阪工場がございます。この工場の西部分の、高速道路淀川左岸線（春開通）を隔てた北側、この赤で丸がしてございます、この辺に北港南寮があったんではないかと思います。それで今この場所は、ここに書いてございます大阪ガス北港工場の敷地内に含まれております。それから先ほどのがり版刷りの要図に〃消防ポンプ〃とございましたが、現在も割方近い場所に消防分署がございます。

さてこの「北港南寮」へ入りましたが、当時の戦争中の情況をよく表しておりますものが、このＯＨＰの諸注意でございまして、ざっと見て参りますと、ここに「制帽制服（中等學校当時ノ

モノ又ハ其レニ準ズルモノニシテ可ナリ)」、それからこれが当時のことを全くよく表しておりますが「服ノ左胸部物入ノ上ニ片布ヲ附ス」と致しまして「三高　何某　○型」と、血液型をちゃんと大きさを指定した(幅五センチ、長さ一〇センチ)白い布に書いて縫い付けておけということでございます。それからここに書いてございます〝配給停止證明書〟、この証明書も入校命令書や注意事項のプリントと共に一括して残しておりました。住んでいる地区の区長の名前で、このように配給停止をします、という証明でございました。それから懐かしい言葉で〝衣料切符〟というふうなものについても書いてございます。私は若くて関係ございませんでしたけれども、「徴兵召集等ニ関スル書類(奉公袋)」も持って来いと、それから夏のことだったからでしょうか、「寝具(夏夜具毛布枕程度ニテ可ナリ、戦災其ノ他ノタメ持参シガタキニハ貸與ス)」とありまして、かなりかさになる荷物を持って行ったようでございます。それから「三角巾薬品若干(特ニハラ薬)」、さらに「針糸鋏等」もございます。それから次のOHPになりまして、もう一つ当時の服装などを表していて興味があります注意は、「はき物(丈夫なる下駄又ハ草履)」でして、ここでやっと当時の三高生を表している言葉に出会ったような気が致します。

このOHPにあります「諸注意」には、本人に対するというよりは半分父兄へあてたような項目がいくつかございます。先ほど話しました七月一日の入学式には父兄も出席されたいということでございましたが、ここの入所には「當日ハ父兄ノ同伴ヲ許サズ単独ニテ入所スベシ」との注

意がございます。また先ほど制服の胸に血液型を書いた白布を付けておけということがございましたが、ここに「豫メ血液型ヲ検査シオクコトチブス豫防接種ヲ完了シ其ノ証明書ヲ持参スルヲ可トス」とか、またこれは全く親あての注意と思いますが、「大阪地区被爆後生徒安否問合セ等ニツキテハ便ナキハ無事ナル旨家庭ニ連絡シオクコト」ということが書いてございます。

それでは入寮後の細かい日程などの話に移ります前に、コピーして頂きました石橋先生のお名前で、第三高等学校修練部長としてのお名前でございますけれども、七月九日付で父兄あてに送られて参りました手紙に目を通して頂きたいと思います。私は退官後までにこの手紙に二、三回は目を通したことがあると思いますが、子供を持つようになりましてから、こういうものを読みますと、当時両親、特に母親は、どういう気持になったであろうかと思います。先ほどから池田君のお名前を度々出しておりますけれども、池田君の、この手紙が当時の世相を最もよく反映している資料と思う、とのお言葉を借りるまでもなく、この手紙からは、自由な三高へ入った、という実感はとても持ちえないというように思います。殊に「一切規律ある行動により、作業能率の向上はもとより、三高部隊としての高き武士道的気品を涵養し、一朝事あらば直ちに戦闘隊とも轉移せしめ、皇國護持の責務を果たしめん決意に有之候。」というくだりではその感を強く致します（注2）。私の場合、この手紙を読み返しまして、今というのはこの当時に比べてどういう時代であるのかと、逆に深く考えさせられるものがございました。

このＯＨＰでは「入所後ノ日程大要」の、七月十二日から二十四日までの分をお見せ致します。先ほども申しましたように先着者は十四日に、大多数は十九日に、ここに「本隊入寮」とございます、寮に入りまして、「編成・待避訓練・環境整理・仮入寮式」と書いてございますが、これらはほとんど覚えておりません。命を救う非常に大事なことになりました待避訓練で、先ほどの地図に書き加えておりましたけれども、割方寮に近い所にあった防空壕への待避を訓練したのだと思います。実は、防空壕と言いましても、京都の市電の走っておりました広い通りの歩道の舗装を剝がして防空壕が造ってございましたが、この土が堅くってそれなりにしっかりしておりましたものに比べますと、この辺の埋め立て地というのは石炭がらがほとんどで、なんと言いますか、吹けば飛ぶような感じのものでございました。よく壕を造れたなというような感じの土地に、後ほどわれわれ全員の命を救うことになる防空壕がございました。どの道を通ってそこへ逃げるかというふうなことを教えてもらい、訓練したんだと思います。二十日は「服装携行品検査・生活細則諸注意・環境整理・仮入寮式」とありまして、二十一日、先ほど申してましたように、午前中に二度目の、北港南寮での入学式があり、午後には入所式がございました。恐らくこの入学式では、私自身ちらっとその記憶がないこともないんですけれども、前田鼎校長がお見えになって、何かお話があったような気も致します。ただこのときに、戦争が終りましてから国語を習うことになりました大城富士男先生が、当時はなかなか右翼的な感じが強かった先生でしたが、教

官代表という形でいろいろと注意などをされていたのが記憶にございます。大城先生の外には、化学の藤田慎三郎先生、数学の奥川光太郎先生、図学の池田総一郎先生なんかがいらっしゃったのを覚えています（注3）。特に大城さんが「俺を始めとして、ここへ来ている教官は、全部三高の卒業生である。」とおっしゃっておりましたのは、今でもはっきりと覚えております。それから二十五日にかけまして、「教官面接」と書いてございます。二十二日は、「各室毎ニ各小隊毎ニ自己紹介懇親休憩」となっております。それで二十三日は「三高の歴史について」（午前中）と書いてございます。後になってからの感想でございますけれども、よくこの話を聴いておいたと思います。そうでなければ三高の歴史も知らずに爆死していたかも知れない身の上だったわけです。二十三日には続きまして、「第二中隊工場見學・第三中隊身体検査予防接種」とございます。私は第三中隊に属しておりました。

さて二十四日のことですが、実は朝から警報が発令されておりました。この日の空襲の話の前に、ちょっと日程的なお話をしておく方が良いのではないかと思います。この二十五日以後の〝日程大要〟を書いたＯＨＰを御覧頂きますと、ここにありますように、三つの小隊に分けて、作業時間が七〇〇―一二〇〇、一二〇〇―一七〇〇、一九〇〇―二四〇〇となっております。これを見ますと、幸いなことに、朝のかなり早い時間に警戒警報が出ますと、全員が寮にいて工場内へはだれも行っていない、ということになります。こういう時間に警報が発令になりました。

それで朝食は多分とっていたんだろうとは思いますが、多分警報が空襲警報に換わった時点で、すぐに先ほど話しました埋め立て地の防空壕へ全員が待避致しました。

爆撃の話はもうちょっと後でまとめてやらせて頂くことにしまして、もう少し今の話の続きに、本来ならこれからどういうことをやるはずであったかということを、見て頂こうと思います。ここに書いてあります、小隊によって一三〇〇―一六〇〇、八〇〇―一一〇〇、一三〇〇―一六〇〇という時間に、それぞれ分かれまして、講義とか、また朝、夕に自習なんかの、ちゃんとしたスケジュールがたてられていたようでございます。どんな課目についての講義かと申しますと、ここを御覧になりますとわかりますように、一週間に、「数學　三時間　物理　一時間半　化學　一時間半　独語　三時間　英語　一時間半　教練　未定」とございます。教練も書いてありますが、三高の教練の先生というのは、私、ついにどんな方か記憶にありませんので、しばらくの間教練はなかったと思います。もう少し八月一日から正規の生活に入りますまでの細かいところを、この「日課時限（自七月二十三日至七月三十一日）」のＯＨＰで見ていきますと、この日課は爆撃に遭いました時間の推定と関係致しますけれども、この表が日々のスケジュールでございます。非常にアーリーバーズでございまして、五時半に起きて、もっとも戦争中だったら早起きは当たり前かも知れませんが、それからいかにも戦争中らしい宮城遙拝・勅諭奉誦、もっともこれは五箇条の項目だけの奉誦だったかも知れません、そして六・一〇から朝食（会食）

がありました。ここに赤丸を付けておりますが、私が研究室を持っておりましたとき、プリントでもして学生に見せたいような感じのことが書いてございまして、「監督教官以下会食・正座・敬礼・頂キマス」、もちろんこれは戦争さなかのことでございますが、「教官（ママ）席迄ハ立タズ当番生徒ノ外食事中席ヲ立タザルコト」とございます。最近の学生さんというのは、私の勤めておりました末期のことですが、先生が何をしていても平気で自分のやりたい行動を致しておりました。六・一〇から六・三〇までが朝食時間ですので、恐らく警報が出たときに朝食は終わっていたであろうと思います。この行には「七・二〇　作業整列」とございますが、これで工場の中に入って行く人があるわけですから、ここまでにはならない時間帯、そういう意味では三高生にとっては非常に運のいい時間帯に、警戒警報、続いて空襲警報発令、そして壕への待避となったのだと思います。ついでに「日課時限」の後の方をさっと見ますと、午前中から午後にかけまして作業か学科講義がありまして、一六・一〇から入浴、一七・三〇―一七・五〇夕食、一八・三〇―二〇・三〇自習、などとなっております。もっとも新入生のわれわれはこの日課をほとんど実行はしておりません。こういうことで、九時には消燈就寝しておりましたわけです。いくら食べ物らしいものを食べずに働いておりましても、九時に寝ておりましたら朝五時半ぐらいには起きられたんではないかと思います。実は入学以来しばらくの間はこういう生活をする予定でございました。と申しますのは、先ほどから何度も申しておりますように、それまでに爆撃されたので

ございます。私は先ほど申しましたように、二十三日身体検査を受けた第三中隊に属しておりました。この時が工場の構内に入りました、後にも先にもただ一回だけの記憶でございます。当然本日お見えの方々の中には、工場見学をされた中隊に属しておられた方もいらっしゃるであろうと思いますが、私が見学もしませんうちに、工場は爆撃で壊滅致しました。空襲の正確な時間はどうもわかりませんで、午前八時台か九時台という漠然とした言い方で申し訳ありませんが、非常にひどい空襲がございました。

私自身は京都で、工場での作業が終わりましてからの帰途、河原町丸太町で防空壕に入って、千本出水辺へ落ちた爆弾の音を聞いた経験しかありませんでしたし、同じ防空壕に待避しておりました友達も、身近に爆弾が落ちたという体験がなかったとみえ、初めは防空壕の中にそんなに緊迫感がなかったことを覚えております。ところが第一波の爆撃が、西成線の沿線でここしかまともに動いている工場はないという、われわれの住友伸銅所をねらったものであるということがわかりました途端、壕内の空気は一変致しました。もうそれからはゆったりと入っているわけにはいきませんで、次の第二波の爆撃からは、壕の真中に折り重なるように固まって、耳と目を押さえ口を開き、体を小さくしていたのを覚えております。そして大きい爆発音、地揺れと共に、壕の中へも爆風の余波が入ってきました。今日の話のために、この空襲のとき落とされた五百キロ爆弾の破片を持って来て頂いております、大学で同じ研究室の同期の卒業生でもあります芦田

恵一君（昭23理）によりますと、空襲は二波であったとのことでございますが、私は三波か、あるいは四波あったような気が致しております。戦後に聞いた話でございますけれども、六十機ぐらいが襲って来ていたんじゃないかということでして、しかもこれらが焼夷弾ではなくて全部爆弾を落として行きました。工場をそれて塀の外に落ちた爆弾は結局二発ほどしかなかったと覚えております。そのそれた一つが、寮のすぐ近くにありました、係長とかそれぐらいのクラスの、勤労動員に行っている中学生ぐらいの年の子供さんがある人達の住んでいる社宅に落ちておりました。社宅四軒分ほどが跡形もなくなりまして、大きい穴となっておりました。爆撃が終わってかなりの時間が過ぎましてから、この穴の縁に、工場の中へ働きに行っていたため助かったのでしょうか、もんぺ姿のお嬢さんが一人、じっと穴を見つめてたたずんでおられたのを覚えております。芦田君にこの話を致しましたところ、それは覚えていないということでした。後ほど芦田君の説明がございますが、これからお回し致しますのがこの時の五百キロ爆弾の破片でございます。こんな大きさの破片（長さ二十数センチ、幅数センチ、厚さ数ミリメートル）が一発体に当たりましたら、手や足の先とかに当たったのでないかぎり、当然命はなかっただろうと思います。この爆撃の精神的な後遺症のようなものですけれども、戦争が終ってから八月の下旬か九月の上旬ごろ、それからその後一、二回、爆弾の落ちてくる音入りの夢でびっくりして起きたことがございます。この爆弾の降る音は、私ら当時の新入生以外にも経験された方が多いかと思いますが、

まあ一口に言ってしまえば〝ざあーっ〟という感じでしょうが、私が一番近いなあと思いましたのは、急な坂を大八車が何台か転げ落ちるような音、というだれかが書いておりました表現です。いずれにしましても、今見て頂いております破片をまき散らして何発かは塀の外へそれましたものの、感心するほどのアメリカの爆撃照準の正確さのおかげで、大方の爆弾は工場内に落ちましたために、レジメの最後の方にも書いておきましたが、三高生の犠牲者は、幸いなことに、ゼロでございました。

これからお話し致しますことは、芦田君の思い出話を聞いて記憶を呼び戻したところもありますけれども、当日寮の方も爆風でやられてしまっておりまして、部屋の中は割れたガラスだらけで、壁の落ちている所もあり、幸い持ち物などは無事でしたけれども、ちょうど最近テレビで見ました阪神大震災の後のような状況でした。それで防空壕の所で仮眠のような形で二十四日の晩は寝たのだと思います。ところが、その晩から二十五日の早朝にかけまして、尼崎の方へ、確かに芦田君が言っておられましたように、焼夷弾による空襲がございました。それはもう正に対岸の火事そのものでして、非常にきれいな眺めであったと言いますと、この空襲で被災された方に全く申し訳ございませんけれども、遠くに大仕掛の花火を見ているような感じだったのは、芦田君に言われまして、すぐに目の前に浮び出しました光景でございます。

これが最後のＯＨＰでございますが、下手な私の字で書いてございますけれども、各人がこう

いうものを書きまして、北港南寮の舎監さん大畑兼二郎さんのはんこをもらいました、罹災証明書の拡大コピーでございます。実はこういうものを持ってますと、乗物もこれを見せまして、確か大阪の市電なんかは、ただであったと覚えています。それから、一応は罹災者ということで、戦後に何か配給をもらった覚えもあります。このようなことで大阪での入学、勤労動員は一週間足らずで終わりました。

レジメの最後にございますように、戦争の終わりを迎えましたのは、登校している期間のことでございました。大阪で爆撃に遭いました後、堅田の現在東洋紡績の総合研究所がございます所に工場がありまして、そこへ勤労動員に行くことになっておりました。それまでの間、どういうことをするために登校していたのか、京都在住者だけが登校しておりましたのか、詳しいことはほとんど忘れてしまいましたが、芋畑、当時グランドが芋畑になっておりましたが、そこの草取りをしていたのは覚えております。八月十五日は登校日であったかどうかも覚えておりませんが、例の玉音放送というのを聞いてから学校に参りましたら、何人かが来ておりまして、確か本館入口の右手あたりで皆が集まっております所へ前田鼎校長が来られまして、無駄なことを一言もおっしゃらずに淡々と、「諸君、もう戦争は負けて終わったのである。これから諸君は勉強しなければいけない。」と、訓示と申しますか、講話と申しますかをされました。この簡潔なお言葉で、学生にとってもう勉強する以外には工場での作業など何もする必要がなくなったのだ、と思いま

したことは、今でも印象深く残っております。

どうも時間が少し超過致しましたが、まあいわば自分史のようなものを皆様の前で話すことができましたのも、ただ私の手元に資料が残っておりましたというだけのことでございます。こんな話に長い時間お付き合い頂きまして、どうも有り難うございました。

（京都大学名誉教授）

［校正時追記］

注1　この話の翌日、七月一日の新徳館での入学式につきまして、小山富太郎君（昭23理）から早速お手紙を頂きました。新徳館の白塗りの内装が、日々工場動員で汚い周囲に慣れた目には非常に新鮮に映ったことと、国民服姿で腕章を巻いておられた大城富士男先生の、「私が大城教授」という第一声は、今でも思い出として残っている、と書いておられます。また、同君は私と全く同じ教室で受験されていて山修さんの問題朗読を聴かれたこと、大阪での空襲に遭った日の夜、防空壕があった海岸の埋立地で、大城先生の発声で六月の沖縄守備隊全滅の際殉職された島田叡知事を偲んで「紅萌ゆる」を歌った思い出も知らせて頂きました。

注2　当日は井垣さんの御指示によりまして、修練部長石橋栄達先生からあて名を「父兄殿」として送られた手紙の全文を読み上げました。かなり長文の手紙ですので、ここに再録することは断念致しま

した。

注3　私は忘れてしまっておりましたが、これらの諸先生の外に西田太一郎先生もいらっしゃったことを、小山富太郎君から御教示頂きました。